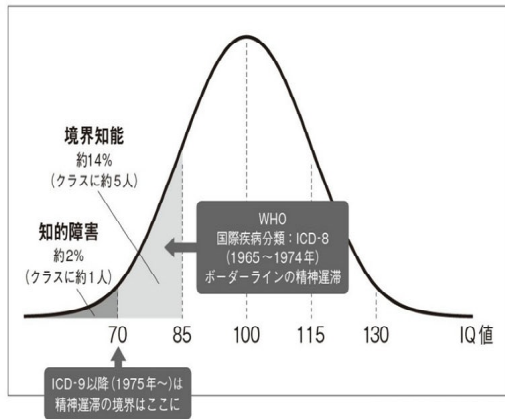


「元気いっぱい・笑顔いっぱい」

特別支援教育統括コーディネーター 加賀谷 勝

「境界知能の子どもたち」より

著者：宮口幸治



- ・ I Q70~85未満は、何らかの支援を必要とする「境界知能」に当たる。統計学上、人口の約14%、35人学級であればクラスに5人ほど在籍している。例えばI Q80であれば、同年齢の子と比べて8割程度の発達水準ということになる。(小4のクラスに小2の子どもが混ざっているイメージ)
- ・ 「境界知能」の子どもの困り感、教科学習についていけない、言い分があるのに伝えられない、抽象的な思考が苦手である、記憶できる容量が少ない(保持する時間も短い)、相手の気持ちを想像できずにトラブルになる、感情のコントロールが難しい、体をうまく動かせないなどがある。

- ・ 子どもの困り感を理解するためには、子どもの目線に立って、何に困っているのかを見ること、そして、子どもの目を見て、相づちを打ちながら、話に耳を傾けることが大切である。

Q：みなさん、注意して聞いてください。Aさんはリンゴを5個持っています。3個あげると、Aさんの持っているリンゴは、全部で何個になりますか？



この問題に答えるために必要な力は・・・

1 注意の集中

先生の話に「注意」を向けることが必要となる。ボーッとしたり、注意が逸れたりすると聞き漏らしや聞き間違いが起こる。

2 知覚

話の内容をしっかりと耳で聞き取り、意味付け、価値付けを行う。

3 ワーキングメモリ (記憶)

リンゴの個数や文章の意味を忘れないように、頭の中に記憶する。

4 言語理解

問題の意味を理解して、どのような計算をしたらよいか考える。

5 計算力、ワーキングメモリ

注意を持続させて暗算をして答えを出す。

6 推理力・判断力

リンゴを5個持っていて誰かからさらに3個もらったのか、リンゴを5個持っていて、誰かに3個あげたのか。先生はどちらを意図したのか「推理・判断」しなければならない。

この簡単な問題でも、1つにでも弱さがあれば解くことはできない。学習に困り感のある子どもは、どこかに、または複数に弱さをもっている。集中できる静かな環境に努める、数字と主語が分かる文章題にする、問題を分かりやすく視覚化するなど、その子の学習のつまずきに即した手立てを考える。また、漢字を覚えるときに「空書き」をするように、指を使って計算したり、下学年の内容に取り組んだりすることも考えられる。



とれたて直送便



「0か100か白黒思考」

100点が取れなくてテストを破ってしまう、ゲームに負けて不安定になってしまうなど、物事をネガティブに考えてしまう子どもがいます。「100点は取れなかったけど、間違った箇所を直すことができた」、「ゲームに負けたけど泣かずに友達を応援した」など、新しい価値観(シナリオ)を教えて、物事をポジティブに捉えられるようにしましょう。

